

円光日陣と中古天台本覚思想

布施 義高
(旧姓 光林)

一、はじめに

中古天台本覚思想に陶醉傾倒したことで知られる室町時代の日蓮教学界にあつて、本迹実相勝劣論を顕揚し純粹日蓮教学の確立を図つた、勝劣派を代表する円光坊日陣(一三三九—一四一九)の知見は、貴重な座標を呈示すると考えられる。

二、日陣における中古天台本覚思想批判の骨子

日陣はその著作中⁽¹⁾一貫して当時の天台宗(中古天台)が宗祖日蓮の教相主義の本門思想と凡そ相容れない観勝教劣の観心主義的教風に立つことを破斥された。殊に『本迹二経実相理浅深事』(応永四年(一三九七))『本迹決』(同五年)等に見られる、本迹論研鑽の中で取り上げられた慧檀面流の学説、わけても慧心流の実相論への批判は、中古天台特有の本覚法門が孕む根源的な問題性への先鋭化された洞察が、室町時代の日蓮教学界に存在したことを跡付ける証憑となるものであ

る。つまり日陣は、慧心流の実相論が、本迹勝劣に則りつつ本門実相の名目に寄せて中古天台本覚思想の真骨頂と言える自然本覚の汎神的な絶対一元世界を意味する本有十界不改、本来本有の無作三身を高唱することを熟知され、これに対し、本仏¹¹事仏の証悟という仏陀論と、断迷開悟の行法論とを宜なきが如く閑却する弊を道破し非難されたのである。

かように旗幟鮮明なる日陣が、当時の日蓮門下各門流において諸国の天台家(中古天台)談所への遊学が積極的には認され彼に独特な法門を漫ろ撰取する傾向を深憂し峻厳と警笛を鳴らされたことは、蓋し自然の趨勢であつたと断じ得よう。

三、日陣の本門思想と中古天台本覚思想

(一) 日陣の寿量顕本義の概要

ところで、日陣著作を繙くと、純正日蓮遺文中心主義が標榜される一方で、中古天台の本覚思想的色彩を一旦帯びるかに映る法門に逢着する場合がある。拙論では、その適例とし

て日陣の寿量頭本義に関する所論に着眼しておきたい。

日陣に依れば、寿量頭本には《①五百塵点、頭本》と《②甚大久遠、本迹を観点とした頭本》との二つの側面が存する。

①は、所謂久近本迹に約した事中の開迹頭本で、五百塵点劫最初成道の事仏ニ本仏ニ積尊の開頭を基軸に、本因本果本国土三妙を枢要とする本妙が顕され、ここに十界依正事相を遠近に約した開迹頭本が描かれると要説する。これが「我常在此娑婆世界云云」（寿量品）あるいは「十界久遠之上、国土世間既ニ頭ル」（「観心本尊抄」）等と叙述される本門事円の法門で、寿量品経文に顕説された世界ニ説相ニに帰結するものである。

対し②は、非本非迹非久非近非遠の實本の詮頭に主眼を置いた実の開迹頭本にして寿量開頭の正意と披瀝され、前者に超勝する時間觀念を有すると打ち出される。それは本門理円と呼称され、日陣が開陳した実相勝劣論の核心となる「本門ニ所レ明ス最初証得、実体本有常住、実相」（『御書本疏聞書集』）を本体とし、本門所詮の絶待理とも本迹雖殊不思議の一の理とも表現されている。更に言えば、ここに衆生己心の真実相、三千諸法を本有の法と描写する源泉が徴され、日陣が日蓮教学の基幹に据えた《教観具足の本門所説の三千実相》の正しく牙城をなす拠点的概念と領受されているのである。

このような日陣の所説は、その法相の同異性を巡って、本覚思想を謳歌した中古天台の所謂（事理二頭本）論と厳正に

対比されねばなるまい。勿論、日陣は此等二種の頭本に（事頭本）（理頭本）といった術語を依用してはいない。が、その論述の中で、中古天台の常套語と化したことで人口に膾炙する（無作三身）（事円）（俱体俱用三身）等の要語を一旦容れていくかに見受けられること、また引証される天台章疏の文にも共通性があり、あるいは《五百塵点ニ迹門》《摺形木、五百塵点》等の中古天台法門を知悉していた様子が窺え、更には中古天台で屢々重んじられた『大乘起信論』「若得ニ始覺ニ還同ニ本覺ニ」や『円覚経』「始知、衆生本来成仏生死涅槃猶如ニ昨夢ニ」を援証とする叙説が見られること―等を慮る時、その概貌の目的を究明しておく必要性を感じるのである。

（二）日陣の寿量頭本義と中古天台本覚思想

日陣に抛れば、②は『観心本尊抄』の「（五百塵点乃至）所頭、三身ヲ（無始、古仏）」に相当し、ここに（無作三身）の根本義が見られている。然も、その実体を「本地難思、境智」「三身即一法身」すなわち本時第一番成道時に周遍法界を全うした、本仏積尊（無始、古仏）の内証、上冥法身の仏体という、事仏の成道を契機に価値化された理と把握されているのであって、超越的仏陀ニ本仏ニから遊離した天然法爾の理法、如来修性已前の素法身を實體とする理頭本の世界に凡夫実仏義の原拠を求める傾向のある中古天台との差違が諒解できる。

従つて日陣は、仏身論的には報中論三の本仏觀を樞軸として、本門教相の五百塵点劫も絶対時間を伴う宗教的事実 \parallel 実説と受容されている。絮説すれば、①は、②より眺めれば三千塵点劫乃至今日成道の仏と等しく施設機前にて數量を挙げた迹中の応現化身と見做され、特に事中の近迹に対する久本の時間的優越性は「迹中指 \parallel 本」（『文句記』釈壽量品）等の表示が用いられるも尚有始の義を存すると一旦解説される。が、此等も実は、久遠本時第一番成道の教主釈尊の仏身を、体用本迹の二身論的視座に基づき（体本 \parallel 真身 \parallel ② \parallel 自受用以上三身 \parallel 本地内証三身 \parallel 仏体）と（用迹 \parallel 応身 \parallel ① \parallel 他受用以下三身 \parallel 仏用）の二面から細説したもので、体用不二（俱体俱用）に真髓が見られている。つまり、一往有始始成の觀念を伴うと説かれる教相上の五百塵点劫譬喩と超時間的非數 \parallel 無始無終の一如融合を義とするのであるから、畢竟ここに壽量品で開顯された本仏 \parallel 事仏の五百塵点劫即無始という久遠性を弁証するものである。而して、そこには中古天台本覚思想でいう五百塵点劫を方便仮説と放擲する勢いと画定が顯然である。然も、かかる仏陀論を機軸としながら十界依正の事相の遠近に約した開顯義 \downarrow 本門事円が謳われている。

ところで、日陣と粗同時代の中古天台の学説には、具には事頭本正意と理頭本正意の両説が並存し、両説共に（理頭本 \parallel 衆生本覚無作三身 \parallel 仏意）（事頭本 \parallel 五百塵点の事成 \parallel 破

迹頭本 \parallel 破 \parallel 近情）という法相を基盤として論を運び、結局、本仏の實在を不要とする凡夫本主論へと傾斜し、行法廷ては教法の等閑視へと頽落した趨向を窺知できる。あるいは、既述の通り日陣が批難を投じた中古天台慧心流では、十界不改、当位即妙を強調する汎神論的な絶対觀に基づく本門実相を鼓舞していた。しかのみならず、本覚思想を高調した暁に仏 \parallel 用、凡夫 \parallel 体と本末顛倒の窮極的な絶対觀を開示しさえする。

日陣は、①からは本仏 \parallel 事仏の顕発を中軸とする十界事相の開迹頭本を説く本門事円を、また、②の位相を本仏内証世界における「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真 \parallel 十界互具 \cdot 百界千如 \cdot 一念三千なるべし」（『開目抄』）という、仏界と九界の矛盾的自己同一の境界と押え、ここに宗祖日蓮の根本真理觀の特質を觀取された。それ故に、日陣は①②の本門における事理両円をそれぞれ仏陀論と衆生論に亘るものと捉え、然も、両頭本共に超越的仏陀 \parallel 本仏を「取りエ」（『御書本疏聞書集』）とすると会得された。加えて、二種頭本の能頭 \parallel 事 \parallel 用 \parallel 《壽量經文の説相》と所頭 \parallel 理 \parallel 体 \parallel の一体不二（二元化）に立脚し、本門事円を面とした事円 \parallel 理円を主張して、ここに本迹両門の説相の浅深勝劣を面とした約説本迹実相勝劣論における、本門事実相の具体的概念を宣揚するのである。つまり、日陣は本門事理両円の帰趨を教法に求め、能動的救済者 \parallel 教主本仏釈尊の超越的實在を大

前提として、本仏開顕を契機に樹立される十界依正常住とすることを顕説した本門教相に即して実相論の究竟を見、更には、この教法主軸の実相勝劣論を根底に置いて、南無妙法蓮華經に依る救済を中核とする末法相應の行法を論理化するに至っており、中古天台との顕著な相違を了知できる。

以上を要するに日陣の所論は、中古天台本覚法門と、教学的表層において確かに近似する面を有しつつ、そこで殊更に汎用された伝統的な天台教学の法相乃至術語を、仏陀論を基調とした宗祖日蓮独自の本門思想の線に沿って敷衍化せしむるところに狙いが存したと言え、彼のいわゆる本覚論とは、實際的に全く異なる方向に展開していることが確認できる。

四、おわりに

叙上のことを総括すれば、日陣の教学は、中古天台の本覚思想が深刻なまでに跳梁した室町時代の教学界の中で、果敢に抵抗を示し、その中で、宗祖日蓮本来の本門思想を蘇生せしめるものであったと結論できよう。日陣の本覚論を中心とする教学体系化が、当時の日蓮門下の本迹論、就中、京都本國寺第五世建立院日伝（二三四—一四〇九）の原始天台教学を實質的な礎石とする本迹実相一致論と抗する（陣伝論争）中で打ち立てられたことは夙に指摘される処である。本稿での概観から、それに加えて視線を凝らすべき教学的特徴が浮き

円光日陣と中古天台本覚思想（布施）

彫りになるう。すなわち中古天台本覚法門が留意すべき問題として重要な課題を与えたことを酌み取れるのである。

そして、このような日陣の宗学研鑽態度が、後の陣門先哲あるいは慶林坊日隆（一三八五—一四六四）等の勝劣派諸師に与えた影響は極めて大きいと思われる。

1 拙論で資料として用いた日陣著作は『日蓮宗宗学全書』第七卷所載の『撰要略記』『本迹同異決（上巻）』『本迹二経実相理浅深事』『本迹二経浅深事』『陣師御談聞書』と消息三十七通、『日蓮宗宗学全書』第二三巻載録の『本迹同異決（下巻）』『法華宗全書』教義篇第四巻所載の『観心本尊抄見聞』『観心本尊抄略見聞』、また『法華宗全書』増補第一輯載録の『雑聞書』『日陣聖人雑御会积集』『御書本疏聞書集』、法華宗宗務院刊『撰要略記私聞書』、『本迹決』（本成寺所蔵写本）等である。

2 尚、このように見てくると、望月歡厚博士が『日蓮宗学説史』で日陣の教学を評して「理顕本論なり…本門の理円を説くが故にこの実本を以て理円とするが故なり…」等と断じたことは、多分に問題が存すると言わなければなるまい。（細註略）

（キーワード） 日陣、中古天台、本覚思想、本門思想、寿量顕本

（法華宗〈陣門流〉学林助教授）